



巻 頭 言

米 国 深 南 部 に て

財団法人日本植物調節剤研究協会理事長
農薬工業会会長
クミアイ化学工業株式会社代表取締役社長

望月信彦

私は所用で海外へ出かける機会が年に2, 3回あるが、米国への出張の折りは2年前より必ず立ち寄る場所が新たにできた。これは既にご存知の方もあらうかと思うが、私が勤めているクミアイ化学工業株式会社が偶々2年前に深南部に位置するミシシッピ州のミシシッピ川沿岸のグリーンビルに、試験農場を開設したことによる。今年は酷暑の7月末に訪れた。

グリーンビルは対岸のアーカンソー州を結ぶ数少ない橋を有し、道路、空路、水路の便の良さがある。偉大な農業州である事から必然的に作物、農業生産資材の物流の要衝となった。更にUSDAとミシシッピ州立大学の研究・普及機関があり、これに付随して世界の農薬、種子会社の研究施設が集中し、密接な情報交換を基にした官民一体となった研究・普及体制が確立されている所である。ノースカロライナ州のリサーチ・トライアングルパークが基礎研究の中心地であるのに対し、より市場に密着した応用研究の中心地帯と言える。そのグリーンビルであるが初めての訪問の際、私が最も驚いた事は、ホテルの水道から茶褐色の水が出たことである。しかしこの水は着色しているが、健康には問題ない旨の説明書が張ってあったが、さすがに飲料用には使う勇気はなかった。後でその事を聞いてみると、ミシシッピ州の伏流水を水源とするこの周辺の水は、ピート層を通して着色するそう。つくづく日本の水道水の良さが身に染みたものであった。一夜、滞在している米国深南部のホテルの静寂な一室で床に就いていると、

故司馬遼太郎氏がこの国を描いた書物の惹句の一節「普遍性があるてイカスものを生み出すのが文明であるとすれば、米国以外にそのような地域はない、即ち新しいモノやコト、思想を含め・・・」を思い出した。書の結論は特段、肯定も否定も明確で無かったように思う。私自身の皮相な読み方かもしれないが、本当にそうであろうか。確かにこの米国は、先人が欧州の科学技術を導入して、肥沃な豊饒の大地を農業生産に有効に利用し、強大な国力を保ち続けている。その様な礎のもと、米国内には強力な化学工業メーカーが更に競合し力を発揮している。これらの状況下グローバル化を要求され、我々日本の農業業界も国際化の荒波に揉まれているなかで僅かながら新規な農薬を世界に送り出している。しかし、司馬氏の言うように真に新しいモノ、我々にとっては新農薬を今以上に創製する力が無いのだろうか、否、必ずあると私は信じている。私どもは何時の日か、日本の農薬が農業生産資材としてこの魅力ある米国の豊かな大地の農業に、強く要望され、的確に調和する時が来ると確信し、その実現を目指している。その為には如何なる労苦も厭わず日夜世界のメーカーに伍して、飽くなき戦いを続けねばならないのである。

そのような壮大な事を考えていると、昼間の厳しい暑さで疲れた体から新たな活力がふつふつと湧いてくるのが感じられ、何時しか心地よい眠りに誘われた米国の深南部の一夜であった。